

一月二十六日(火)

平成二十八年 度 金沢学院大学 入学試験問題 (一般入試Ⅰ期)

国 語

(注意事項)

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。
問題は1ページから20ページまであります。
第2問途中から受験する学部によって解答する設問が異なりますので、注意してください。
問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

(解答上の注意)

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して④と解答する時は、下記の(例)のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

問題は、次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えよ。

五年前に、中華料理についてある話を聞きました。

中華料理のコツは材料を同じ大きさに切ることだ、と。単純なことに思えるかもしれませんが、料理の習熟度とは関係なく、それが上手くつくる秘訣だといいます。これを聞いたときに、ぼくの建築と同じだな、とどこか A。

材料それぞれの制約はありますが、基本的に同じくらい大きさに切る。（ a a ） チンジャオロース 青椒肉絲だったら肉とピーマンを千切りにするし、鶏とカ

シューナッツなら、カシューナッツの寸法を基本にして鶏肉を切っていく。これは、「ルーバー」と呼ばれる明るさを調整するための格子と同じです。ルーバーの寸法と周りの環境を構成するエレメントの寸法を揃えることで、「ア おいしい」建築に近づいていけるのです。ルーバーの背後にある建築本体を支える柱とのバランスも重要です。栃木県的那珂川町馬頭広重美術館でいえば、ルーバーは3センチ×6センチの大きさですが、その後ろの柱は、普通に設計すれば最小でも30センチ角くらいの太さになってしまいます。これでは、B です。柱とルーバー（格子）とを同じ大きさに属するグループにするため、柱は7.5センチ×15センチまで細くしました。その結果炒め物の野菜の大小くらいに揃った。

同じ大きさにすれば、料理でいえば熱の通り方も同じになるし、一口で食べるサイズが均一になり、考えなくても雑に噛めばよくなります。消化するときもスムーズです。人間が何かを体内に取り込むときに、それは大切なことではないでしょうか。

「建築は眼で見るもの」と考えられがちですが、実は建築に接すること、物質を体内に取り込むことは同じではないかと考えています。どちらも、身体的に取り入れるのに程よい大きさにすることが肝要です。その大きさは、人間だけの理屈で決まっているわけではなく、モノだけの理屈で決まっているわけでもない。人間とモノとの両方で落ち着くポイントを探ってきたのではないかと思う。人間の身体性とモノの特性の C を見出していく——中華料理の話の聞いてから、「建築も眼で見ているだけではなくて、モノを取り込むプロセスで考えなくてはいけない」と、考えが収斂しゅうれんしていきました。

周りの環境と調和する素材選びも同じです。例を挙げれば、先ほど挙げた広重美術館も、ONE表参道（東京都港区のファッションビル）も、両方とも木がベースですが、広重美術館は細い杉材で、ONE表参道は大きな木材です。広重美術館は周りの風景が繊細で、細い枝に囲まれている。ONE表参道のほうは、荒っぽい街の風景にある。雑な風景に繊細なものを挿入すると違和感が生じるはずで。（ b b ） 街を構成する基準寸

法を見つける必要がある。この大きさのもたらす感覚を「^(イ)粒子感」と呼んでもいい。レストランのインテリアでも同じです。食欲は、その料理そのものの粒子感だけでなく空間全体の粒子感が影響します。(c) レストランの粒子感と周りの街の粒子感とのバランスがとれていないと、美しいだけで流行りません。人間が環境を確認する手段として粒子を捉えるのは有効です。アフオーダンス(何らかの行為を引き出す、環境の持つ機能)のセオリーでいえば、画像的な世界認識をアフオーダンスは否定しています。廊下を壁の左側に沿って歩いているとき、正面に見える画像よりも、身体の左手に触れる壁の粒子感こそが人間に影響を与えていると考えます。距離をおいた画像として見るのではなく、空間をスキャンするよ^(ウ)うな身体的感覚こそが人間を支配しているらしいのです。それは目に頼らず、舌に載せて味を見るところと同じです。味わうということです。料理は舌を使って、建築のときは体でスキャンして味わう感触なのです。

別の方向からいうと、「建築はどんぶり」だと思っ^(エ)ているんです。どんぶりは、内容はともかく、ご飯に何らかの具を載せるものです。そこで、二つの異種のスケールをつなぐ媒介となるものを考えます。たとえばどんぶりに卵をかけることを想像してみてください。卵は何をしているかという^(カ)と、ご飯と上に載る具をつないでいます。卵のおかげで、余計なことを考えずに両者を体の中に取り込めるのです。この媒介を使っ^(キ)つなぐ作業は、建築設計上で材料を決定する作業とよく似ている。

飛び出している柱と壁から出ている照明器具を合わせるとしたら、(d) 和紙のスクリーンを媒介として入れます。そのスクリーンが、どんぶりものでいえば卵やタレでして、その柔らかさが、異質なふたつの要素をつなげます。まぶしてくれるんです。広重美術館もそうです。光を調節し^(ク)つつ、周りにまぶす。(e) あ、あの建築はどんぶりなんです。^(ケ)建築論のエッセンスはどんぶり構造にある。料理も建築も美しさではないんです。建築家は常に美しさを^(コ)追究するというけれど、そうではない。最終的にはある視覚的な段階に到達して「美しさ」を持つことはあっても、目的としているわけではない。おいしいものは、見た目も美しいことが多いですが、あくまでも結果論です。

普通の建築の教科書は、視覚的な美しさから入って、^(コ)黄金比やプロポーションの話になることが多いけれど、このプロポーションの話には昔から違和感がありました。

D

どんぶりを実際に食べているときの人間の脳は、^(注2)クライマーズハイと同じ状態の脳波を出すそうです。かきこんで我を忘れるときがあるでしょう、ある意味で意識が飛ぶんです。お茶漬けのCMでも、夢中でかきこむ姿が宣伝になるのは、あれがどんぶりものを食べる^(注3)ときの^(注4)特徴的な状態

だからです。そういう何も考えない状態を建築で作れたら、理想です。作っている人間の浅い思惑とか意図を感じさせてもしょうがないわけで、一心不乱にどんぶりを食べてもらう状況というのは、建築の最終目的なのかもしれません。「アーキテクトツハイ」とでも言いましょうか。今の建築は、頭で考えることを強要しすぎる。理想は「モどんぶりのように無心に身体で建築を取り込んでもらうこと。ぼくは、人間が生物として空間に自分の身体を預けるといいう状態を作りたい。生物として本能的に、とっていいかもしれません。」

(隅研吾「どんぶり建築論」、『考える人』による)

【注】 1 黄金比……人間にとって最も安定し、美しいと考えられている比率。

2 クライマーズハイ……登山者の興奮状態が極限に達し、正常な感覚が麻痺して危険や恐怖などを感ぜられなくなること。

問1 空欄 A に入れる慣用句として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。解答番号は 1。

- ① 顔をほころばせました
- ② 血が騒ぎました
- ③ 心がはずみました
- ④ 身につまされました
- ⑤ 腑ふに落ちました
- ⑥ 腕が鳴りました

問2 空欄 (a) (b) (c) (d) (e) に入れる接続詞として最も適当なものを、次の①～⑧の中から一つずつ選べ。なお、選択肢は何度使っても構

わない。解答番号は a = 2、b = 3、c = 4、d = 5、e = 6。

- ① さらに
- ② ところで
- ③ しかし
- ④ つまり
- ⑤ やはり
- ⑥ もっとも
- ⑦ だから
- ⑧ たとえば

問3 傍線部(ア)「おいしい」とは、文中ではどのような意味で使われているか。最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。

解答番号は 7。

- ① 周囲の環境から浮かないよう街の風景と建築パーツが調和しており、パーツの寸法も統一されていて心地よさがある。
- ② 建築本体を支える柱と建築パーツの寸法や色合いのバランスが絶妙で、違和感なく見事に風景の中に溶け込んでいる。
- ③ 中華料理の素材を同じ大きさに切るように建築パーツの寸法がきれいに統一されていて、見ていて爽快感を得られる。
- ④ 周囲の環境と建築パーツの寸法が揃っていて、人が自らの中にその建築を取り込みやすくする工夫がこらされている。
- ⑤ 街との調和を第一に建築パーツが選ばれ、訪れる人がもつとも心地よいと思う寸法に、パーツが切り分けられている。
- ⑥ 人の居心地の良さを最大限に追究した建築パーツを使用し、周囲の環境に合わせて最も適切な寸法に切り揃えてある。

問4 空欄 B に入れるのに最も適当な語句を、次の①～⑥の中から一つ選べ。解答番号は 8。

- ① ひき肉が小さな肉よりも、大きくみえるようなもの
- ② ひき肉が小さな肉の中に紛れ込んでいるようなもの
- ③ ひき肉が小さな肉の中で、浮いたようにみえるもの
- ④ ひき肉が大きな肉に紛れて、目立たなくなったもの
- ⑤ ひき肉が大きな肉より目立つようにみえているもの
- ⑥ ひき肉が大きな肉の塊の中に入っているようなもの

問5 空欄 C に入れるのに最も適当な語を、次の①～⑥の中から一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 共通点
- ② 相違点
- ③ 融合点
- ④ 妥協点
- ⑤ 基準点
- ⑥ 分岐点

問6 傍線部(イ)「粒子感」にあてはまらないものを、次の①～⑧の中から二つ選べ。解答番号は 10、11。

- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| ① レストランの外観写真 | ② レストランで出される料理 | ③ レストランの周囲の環境 |
| ④ レストラン内の空間演出 | ⑤ レストランの評判 | ⑥ レストランのインテリア |
| ⑦ レストランの壁の感触 | ⑧ レストランの料理の味 | |

問7 傍線部(ウ)「建築論のエッセンスはどんぶり構造にある」とは、どういうことか。意味として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。解答番号は 12。

- ① どんぶり飯において、卵がご飯と具をまとめて食べやすくなるようになるのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるために、さらに別の素材を追加してバランスを保とうとすること。
- ② どんぶり飯において、卵がご飯と具の媒介となつてご飯と具の両方を身体に取り込めるようになるのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるために、何らかの媒介を使うということ。
- ③ どんぶり飯において、卵がご飯と具の味を引き立てて栄養バランスがよくなるのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるためにそれぞれの個性を引き立てるための加工を加えること。
- ④ どんぶり飯において、卵がご飯と具の媒介となつて食感をなめらかにするのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるために、媒介を用いて素材感の違いを目立たないようにすること。
- ⑤ どんぶり飯において、卵がご飯と具の素材の雑味を消す働きがあるのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるために、別の素材を媒介として使うことで、素材の欠点を中和すること。
- ⑥ どんぶり飯において、卵がご飯と具を混沌とした状態にして別の料理にしてしまうのと同様、建築も異なる素材を組み合わせるために、媒介を使って素材の長所を最大限に引き出すこと。

問8 次の①～⑤は、本文の空欄 D に書かれていたものである。筋が通るように正しい順序に並べ替え、2番目、4番目の番号をそれぞれ答えよ。解答番号は2番目 13、4番目 14。

- ① そんなことを以前から漠然と考えていて、中華料理の話を聞いたときに、建築家は柱一本だけのプロポーシオンを追い求めてもしようがない、
- ② ギリシャの柱なら、柱の寸法が石という素材の持つ本質とどう絡み合っているかが大切です。
- ③ 柱がギリシャ建築のような太さの比率であることは人間にとってはいつでもいい話です。
- ④ 大事なのは、身体感覚と材料の本質に対する観察なのだということがやっとわかってきました。
- ⑤ それよりも、柱自体と構造物全体の寸法の揃い方のほうが重要です。

問9 傍線部(エ)「どんぶりのように無心に身体で建築を取り込んでもらうこと」に込められている筆者の意図として最も適当なものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。解答番号は 15。

- ① どんぶり飯を食欲に任せて一気にかきこんで食べるように、建築物も本能のおもむくまま、自由に楽しんで欲しい。
- ② 一つ一つの素材を味わいながらどんぶり飯を食べるように、建築物も素材や雰囲気などを味わいながら見て欲しい。
- ③ 何も考えずにどんぶり飯をかきこんで食べるように、建築物も頭で考えずに、生物的な本能で身をゆだねて欲しい。
- ④ 複数の素材が一体化したどんぶり飯の味を楽しむように、建築物も複数の素材の組み合わせの妙を観察して欲しい。
- ⑤ 気取って食べる必要のないどんぶり飯のように、建築物も設計者の意図を気にしないで気負わずに利用して欲しい。
- ⑥ ご飯に具が無造作にのせられたどんぶり飯のように、建築物も余計なことを考えずに、無心になって訪れて欲しい。

問10 本文の終わりの方で使われている「追究」、「特徴」(二重傍線部※)には、それぞれ同音異義語がいくつかある。次の「く」の各文の「ツイキユウ」「トクチョウ」の表記として最も適当なものを、後の語群①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

ㄱ	犯人をツイキユウする。	<input type="text" value="16"/>	ㄱ	学問をツイキユウする。	<input type="text" value="17"/>
ㄷ	幸福をツイキユウする。	<input type="text" value="18"/>	ㄴ	真理をツイキユウする。	<input type="text" value="19"/>
ㄴ	利益をツイキユウする。	<input type="text" value="20"/>	ㄷ	責任をツイキユウする。	<input type="text" value="21"/>
ㄹ	犯人のトクチョウ。	<input type="text" value="22"/>	ㄹ	新製品のトクチョウ。	<input type="text" value="23"/>
ㅁ	トクチョウを生かす。	<input type="text" value="24"/>	ㅁ	トクチョウのある声。	<input type="text" value="25"/>

語群	① 追究	② 追及	③ 追求	④ 特徴	⑤ 特長
----	------	------	------	------	------

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。文学部の受験生は問1～6を、文学部以外の受験生は問1～8を解答すること。

「津田」と「お延」は結婚して半年余りの夫婦で、「津田」は働いているにもかかわらず、京都にいる父親から金銭的援助を受けている。現在、「津田」は病で入院しているが、手術・入院等に必要な追加の金銭をめぐって、お金を持ってお見舞いに来ていた妹の「お秀」と口論になる。そこに「お延」が現れ、叔父の「岡本」から貰った小切手を差し出したので、「お秀」は捨て台詞を吐いて出て行ってしまった。

「彼奴は理窟屋だよ。つまりああ捏ね返さなければ気が済まない女なんだ」

「だってあたし始めてよ」

「お前は始めてさ。おれは何度だか分りやしない。一体何でもないのに高尚がるのが彼奴の癖なんだ。そうして(注1)生じい(注2)藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」

「どうして」

「どうしてって、藤井の叔父の傍にいて、あの叔父の議論好きな所を、始終見ていたもんだから、とうとうあんなに口が達者になっちゃったのさ」

津田は馬鹿らしいという風をした。お延も苦笑した。

久し振に夫と直に向き合ったような気のお延は嬉しかった。二人の間に何時の間にか懸けられた薄い幕を、急に切って落した時の晴々しい心持になった。

彼を愛する事によって、是非とも自分を愛させなければ己まない。——これが彼女の決心であった。その決心は多大の努力を彼女に促がした。彼女の努力は幸い①「トロウ」に終らなかつた。彼女は遂に酬いられた。少なくとも今後の見込を立て得る位の程度に於て酬いられた。彼女から見れば不慮の出来事と云わなければならないこの破綻は、取も直さず彼女に取って②復活の曙光であった。彼女は遠い地平線の上に、薔薇色の空を、薄明るく眺める事が出来た。そうしてその暖かい希望の中に、この破綻から起る凡ての不愉快を忘れた。(注3)小林の③「ザンコク」に残して行った正体の解らない黒い一点、それはいまだに彼女の胸の上にあった。お秀の口からA「出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍い瞬きを見せた。然しそれらはもう遠い距離に退いた。少くともさほど苦にならなかつた。耳に入れた刹那に起った昂奮の記憶さえ、再び呼び戻す必要を

認めなかった。

「若し万一の事があるにしても、自分の方は大丈夫だ」

夫に対するこういう自信さえ、その時のお延の腹には出来た。従って、いざという場合に、どうしても③リンキの所置を付けて見せるという余裕があった。相手を片付ける位の事なら訳はないという気持も手伝った。

「相手？　どんな相手ですか」と訊かれたら、お延は何と答えただろう。それは臍氣に薄墨で描かれた相手であった。そうして女であった。そうして津田の愛を自分から奪う人であった。お延はそれ以外に何にも知らなかった。然し何処かにこの相手が潜んでいるとは思えた。お秀と自分等夫婦の間に起った波瀾が、ああまで際どくならず済んだなら、お延は行掛り上、是非とも津田の腹のなかにいるこの相手を、遠くから探らなければならぬ順序だったのである。

お延はそのプログラムを狂わせた自分を顧みて、寧ろ幸福だと思った。気掛りを後へ繰り越すのが辛くて耐らないとは決して考えなかった。それよりもこの機会を緊張出来るだけ緊張させて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んで置く方が得策だと思案した。

こう決心するや否や、彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であった。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の両面に亘って、窮地から救い出したものは、自分が持つて来た小切手だという事を、深く信じて疑わなかった彼女には、寧ろ重大な意味を有っていた。

その時津田は、小切手を取り上げて、再びそれを眺めていた。其所に書いてある額は彼の要求するものより却って多かった。然しそれを問題にする前、彼はお延に云った。

「お延有難う。お蔭で助かったよ」

お延の嘘はこの感謝の言葉の後に随いて、すぐ彼女の口を滑って出てしまった。

「昨日、岡本へ行ったのは、それを叔父さんから貰うためなのよ」

津田は案外な顔をした。岡本へ金策をしに行つて来いと夫から頼まれた時、それを断然跳ね付けたものは、この小切手を持つて来たお延自身であった。一週間と経たないうちに、何処からそんな好意が急に湧いて出たのだろうと思うと、津田は不思議でならなかった。それをお延はこう説明した。

「そりゃ厭なのよ。この上叔父さんにお金の事なんかで迷惑を掛けるのは。けれども仕方がないわ、あなた。いざとなればその位の勇気を出さなく

「つちや、妻としてのあたしの役目が済みませんもの」

「叔父さんに訳を話したのかい」

「ええ、そりや随分辛かったの」

お延は津田へ来る時の仕度を大部分岡本に拵こしらえて貰っていた。

「その上お金なんかには、些ちつとも困らない顔を今日までして来たんですもの。だから猶な極おきりが悪いわ」

自分の性格から割り出して、こういう場合の極りの悪さ加減は、津田にもよく呑み込めた。

「能く出来たね」

「云えば出来るわ、あなた。無いんじゃないんですもの。ただ云い悪にくいだけよ」

「然し世の中には又お父さんのお秀だのっていう、むずかしやも揃そろってるからな」

津田は却って自尊心を傷きずけられたような顔付をした。お延はそれを取り繕つくろうように云った。

「なにそう云う意味ばかりで貰って来た訳でもないのよ。叔父さんにはあたしに指輪を買って呉くれる約束があるのよ。お嫁に行くとき買かって遣やらな
い代りに、今に買かって遣やるって、此間こゝからそう云いったのよ。だからその積つりで呉くれたんでしよう大方。心配しんぱしないでも可かいわ」

津田はお延の指を眺めた。其所には自分の買かって遣やった宝石がちゃんと光あっていた。

二人は何時になく融とけ合った。

今までお延の前で体面を保つために武装ぶくろしていた津田の心が吾われ知らず弛ゆるんだ。自分の父が(注6)鄙吝ひりんらしく彼女の眼めに映うつりはしまいかという掛念かけねん、
或あるは自分の予期以下に彼女が父の財力を見縊みくびりはしまいかという恐れ、二つのものが原因げんいんになつて、成なる可べく(注7)京都の方面あそびに曖昧あいまいな幕を張り通そ
うとした警戒が解けた。そうして彼はそれに気付きづかずにいた。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力で其所へ押し流されて来た。用心深い彼
をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼を其所まで運んで来て呉くれたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉うれしかった。改あらめようとする決心けつしんなし
に、改あらたまつた夫の態度には自然があつた。

同時に津田から見たお延にも、亦またそれと同様の趣が出た。余事は暫しばらく問題外に措おくとして、結婚後彼等らの間には、常に財力に関する妙な暗闘あんとうがあつた。そうしてそれはこう云う因果から来た。普通の人のように富を誇りとしたがる津田は、その点に於て、自分を成る可く高くお延から評価ひやうさ

せるために、父の財産を実際より遙か余計な額に見積った所を、彼女に向つて吹聴した。それだけならまだ可かった。彼の弱点はもう一步先へ乗り越す事を忘れなかった。彼のお延に匂わせた自分は、今より大変楽な身分にいる若旦那であった。必要な場合には、幾何でも父から補助を仰ぐ事が出来た。たとい仰がないでも、月々の支出に困る憂は決してなかった。お延と結婚した時の彼は、もうこれだけの言責を彼女に対して脊負って立っていたのと同じ事であった。利巧な彼は、財力に重きを置く点に於て、彼に優るとも劣らないお延の性質を能く承知していた。極端に云えば、黄金の光りから愛その物が生れるとまで信ずる事の出来る彼には、どうかしてお延の手前を取繕わなければならぬという不安があった。ことに彼はこの点に於てお延から軽蔑されるのを深く恐れた。(注8) 堀に依頼して毎月父から助けて貰うようにしたのも、実は必要以外にこんなコンタンが潜んでいたからでもあった。それでさえ彼は何処かに畑たい所を有っていた。少くとも彼女に対する内と外には大分の距離があった。(注9) 眼から鼻へ抜けるようなお延にはまたその距離が **B** 分った。必然の勢い彼女は其所に不満を抱かざるを得なかった。然し彼女は夫の虚偽を責めるよりも寧ろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はただ水臭いと思った。何故男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出して呉れないのかを苦しめた。仕舞には、それを敢てしないような隔りのある夫なら、此方にも覚悟があると一人腹の中で極めた。するとその態度がまた **C** 津田の胸に反響した。二人は何処まで行っても、直に向き合う訳に行かなかった。しかも遠慮があるので、成るべく其所には触れないように慎んでいた。ところがお秀との悶着が、偶然にもお延の胸にあるこの扉を一度にがらりと敲き破った。しかもお延自身毫も其所に気が付かなかった。彼女は自分を夫の前に開放しようという努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまった。だから津田にもまるで **D** 快よく見えた。

(注10) 二人はこういう風で、何時になく融け合った。すると二人が融け合った所に妙な現象がすぐ起った。二人は今まで **カイヒ** していた問題を平気で取り上げた。二人は一所になつて、京都に対する **善後策** を講じ出した。

(夏目漱石『明暗』による)

(注)

- 1 「生じい」：「生」は当て字。なまじつか、の意味。
- 2 「藤井の叔父」：「津田」の父の弟で、東京郊外に住んでいる。津田の父親は地方を転々と移り歩く官吏だったので、「津田」や「お秀」は、この「藤井の叔父」のもとで育てられた。
- 3 「小林」：「津田」の知人。

- 4 「小切手」：銀行に当座預金のある者が、一定の金額を支払うことを銀行に委託する有価証券。現金の代わりに支払いにあてる。
- 5 「岡本」：「お延」の叔父。彼女は、叔父夫婦によって育てられ、特に叔父にはかわいがられた。
- 6 「鄙吝」：いやしく、極めてけちなこと。
- 7 「京都の方面」：「津田」や「お秀」の両親は、すでに隠居して京都に住んでいる。ここでは特に父親のことを指している。
- 8 「堀」：「お秀」の夫。

問1 傍線部(ア)「何でもないのに高尚がる」・(エ)「眼から鼻へ抜けるような」・(カ)「善後策を講じ出した」の語句の、この本文における意味内容を最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、(ア) ≡ 26、(エ) ≡ 27、(カ) ≡ 28。

(ア) 「何でもないのに高尚がる」

- ① 取り立てていうこともないのにまるで身分が高い人のように威張る
- ② 実際は理解していないのに理屈を筋道立てて述べられるようにする
- ③ どうということもない事柄をあたかも重大事件のように騒ぎ立てる
- ④ たいしたことないのに知性があつて立派であるかのようにふるまう
- ⑤ 無意味で馬鹿馬鹿しいことを何も知らずに無意識のうちに実行する

(エ) 「眼から鼻へ抜けるような」

- ① 表情を出さずにためらいなく実行できる
- ② 目鼻立ちがきちんと整っていて美しい容貌の
- ③ 他人の心が見通せるような利発さを持った
- ④ 物事にこだわらずさっぱりとした性格の
- ⑤ 抜け目なく利口で物事を判断するのが素早い

(カ) 「善後策を講じ出した」

- ① これからの出来事のあとさきを予想し合った
- ② これまでの面倒な事柄の後始末を話し合った
- ③ これから先がよい結果になる方策を相談した
- ④ これまでの夫婦生活をお互いに反省し合った
- ⑤ 物事や出来事がよい方向に進むことを祈った

問2 本文の空欄 A 〓 D に入る最も適当な語句を、次の①〓⑤の中から一つずつ選べ。

解答番号は、A 〓 29、B 〓 30、C 〓 31、D 〓 32。

- ① 木精こだまのように
- ② 逆さかばしるように
- ③ 手に取るとる如ごとくに
- ④ 疾風はやての如ごとくに
- ⑤ 別人べつじんのように

問3 傍線部(イ)「復活の曙光」とあるが、この比喩の意味する内容として最も適当なものを、次の①〓⑤の中から一つ選べ。

解答番号は、33。

- ① お秀との悶着もんちやくによって壊れた夫婦の仲をはじめからやり直す希望を得たこと。
- ② 金銭問題によってこじれた夫婦生活を薔薇色に彩る手掛かりが持てたこと。
- ③ 結婚生活によって失われた自己を取り戻すことができる予感がしたこと。
- ④ 今まで不安や不満のあった夫婦関係の未来に明るい兆しが見えはじめたこと。
- ⑤ お秀との口論で批判された自分の名誉を輝かしいものとして取り戻せること。

問4 傍線部(ウ)「彼女は嘘を吐いた」とあるが、「お延」は具体的にどのような「嘘を吐いた」のか。その内容の説明として最も適当なものを、

次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は、

34。

- ① 津田の過去に疑惑があるのに、自分の方は大丈夫だという嘘。
- ② 岡本の叔父にお金の事で迷惑を掛けるのは極が悪いという嘘。
- ③ 津田の相手を探ることを後へ繰り越すのが辛くて耐らないという嘘。
- ④ 昨日自分から岡本の叔父に頼んで小切手を貰ってきたという嘘。
- ⑤ 岡本の叔父が自分に指輪を買って呉れる約束があるという嘘。

問5 傍線部(オ)「二人はこういう風で、何時になく融け合った」とあるが、本文全体を踏まえて、このような「津田」と「お延」の関係を具体的に説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は、

35。

- ① 京都にいる父親への対応に苦労はしたが、お秀との悶着をきっかけにして、津田とお延は利害関係を共有し同じ方向の目的に向かって進むことができた。
- ② 各々の隠しごとや嘘、打算によって成立したものではあったが、お秀との喧嘩をきっかけにして、津田とお延は自然と心を開き直に向き合うことができた。
- ③ お互いに秘密や嘘を抱えていることを意識して警戒はしていたが、お秀との喧嘩によって、津田とお延は全てを忘れて夫婦関係をうまく修復することができた。
- ④ これまででは離婚の危機さえあったが、お秀との口論によって一時的に和解し、津田とお延はもう一度努力して夫婦関係をやり直すことができた。
- ⑤ これまででは財産をめぐる格闘があったが、お秀を共通の敵とすることで損得が一致し、津田とお延は意図的に心を通わせて仲直りをすることができた。

問6 この本文全体の表現の特徴や内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は、36。

- ① 語り手が津田とお延の意識にそれぞれ焦点を当てて、お互いの思惑や心の駆け引きを精緻に描いている。
- ② 漢語や抽象語を多く使用した文章で、神の視点に立つ語り手が津田やお延の心の謎を神秘的に描いている。
- ③ 比喩や倒置法などの表現技法を多く使用しながら、津田とお延の不思議な夫婦関係を象徴的に描いている。
- ④ 女性の意識に焦点を絞り、お延の女性としての自我の確立や津田に対する愛情を情熱的に描いている。
- ⑤ 男性としての津田のエゴを赤裸々に明らかにすることで、妻としてのお延の苦悩を誇張して描いている。

【以下の問7～問8は、文学部以外の受験生が解答せよ。文学部の受験生は第3問（古文）を解答せよ。】

問7 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は、37～41。

- ① トロウ 37
- ① 太平洋をトコウする客船。
 - ② 大学までトホで通学する。
 - ③ 成功まではゼント多難である。
 - ④ 過去にトタンの苦しみを味わう。
 - ⑤ 平城京から長岡京へセントする。

- ② ザンコク 38
- ① 空はシツコクの闇に閉ざされた。
 - ② 心理をコクメイに描いている。
 - ③ 自分の作品がコクヒョウされた。
 - ④ シンコクな問題を抱えている。
 - ⑤ 地方裁判所にゲンコクが訴えた。

- ③ リンキ 39
- ① 難民がリンセツする国へ移動した。
 - ② 彼はジンリンにもとる行為をした。
 - ③ クラスで小説をリンドクする。
 - ④ フウリンの涼やかな音がする。
 - ⑤ 王者として長くクンリンする。

【以下は文学部の受験生のみ解答せよ。】

第3問 次の文章を読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。

鳥羽法皇の女房、(注1) 小大進といふ歌よみありけるが、(注2) 待賢門院の御衣一重、失せたりけるを負ひて、北野に籠り、祭文書きて、まもられるに、三日といふに、(注3) 神水をうちこぼしたりければ、まもり檢非違使、「これに過ぎたる失やあるべき。出で給へ」と申しけるを、小大進泣く申すやう、「(注4) おほやけの中のわたくしと申すは、これなり。いま三日の暇をたべ。それにしるしなくは、われを具して出で給へ。恨みあるまじ」と、(ア) みめ、かたち足らひ、愛敬づきたる女房の、うち泣きて申しければ、檢非違使もあはれに思ひて、のべたりけるほどに、小大進、

思ひ出づや、(イ) なき名たつ身は憂かりきと現人神になりし昔を

とよみて、(ウ) 紅の薄様一重に書きて、御宝殿におしたりける夜、鳥羽法皇の御夢に、御覧するやう、(A) よにけたかく、やむごとなき翁の、束帯にて御枕に立ちて「やや」とおどろかし参らせて、「われは北野の右近馬場の神にて侍る。めでたきことの侍る。御使たまはりて、見せ候はむ」と申し給ふ、とおぼしめして、うちおどろかせ給ひて、「天神の見えさせ給ひつる。いかなる御事のあるぞ」と、「見て参れ」とて、「鳥羽の御馬屋の御馬に、北面のものを乗せて、馳せよ」と仰せられければ、馳せて参りて見るに、小大進は雨しづく泣きて候ひけり。

御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを取りて参るほどに、いまだ参りつかぬさきに、鳥羽殿南殿の前に、かの失せたる御衣をかづきて、さきをば法師舞ひ、しりをば敷島とて、待賢門院の雑司なりけるが、かづきて、獅子に舞ひて、参りたりけるこそ、天神の(ウ) あらたに歌にめでさせ給ひたりけると、めでたく侍れ。

すなはち、小大進をば召しけれども、「かかる(注5) もんかうを負ふことは、心わろきものにおぼしめさるるやうのあればこそ」とて、やがて仁和寺なるところに籠もり居にけり。

力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はず

と、Bの序に書かれたるは、これらのたぐひなり。

『十訓抄』十・十六による

(注) 1 小大進―平安後期の歌人。菅原在良の娘。源有仁に仕えた。

2 待賢門院―藤原璋子(一一〇―四五)。藤原公実の娘で鳥羽天皇中宮となり、崇徳天皇を産む。

3 神水―神前に供える水。神に誓う時に、これを飲んだ。

4 おほやけの中のわたくし―公の中の事柄であつても、少しは個人の裁量を働かせることがあるということ。

5 もんかう―「問考」(疑いの意)かと考えられている。

問1 傍線部(A)「よにけたかく、やむことなき翁」は生前、何という歴史上の人物だったのか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 37。

- ① 源 高明
- ② 九条師輔
- ③ 伴 善男
- ④ 菅原道真
- ⑤ 都 良香

問2 空欄 B にあてはまる著作は何か。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 金塊和歌集
- ② 文華秀麗集
- ③ 新古今和歌集
- ④ 万葉集
- ⑤ 古今和歌集

問3 傍線部(ア)「みめ、かたち足らひ、愛敬づきたる女房」、(イ)「なき名たつ身は憂かりきと」、(ウ)「あらたに歌にめでさせ給ひたりけると」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 39、(イ) 40、(ウ) 41。

(ア) みめ、かたち足らひ、愛敬づきたる女房

- ① 顔立ち、姿かたちともに申し分なく、魅力的で美しい女房。
- ② 外見だけが美しく、性格がひょうきんな感じのする女房。
- ③ 顔立ち、姿態に少し難点があるが、魅力があつて美しい女房。
- ④ 見た目の姿形が申し分ないのに、立ち居振る舞いがしどけなさすぎる女房。
- ⑤ 容貌や姿かたちに少し欠けたところがあるにも関わらずはつらつとした感じの女房。

(イ) なき名たつ身は憂かりきと

- ① 無名だった自分の名が知られるようになるのが鬱陶しかったと
- ② なんの事実もない恋のうわさを立てられたこの身が悲しいと
- ③ 誰にも知られなかった恋がうわさになって厭いとわしかったと
- ④ 昔は知られなかった本名が知られてしまって辛かったと
- ⑤ 身に覚えのない罪を着せられた身は辛かったと

(ウ) あらたに歌にめでさせ給ひたりけると

- ① 靈験を改めて和歌をご賞美なさったとかいうことで
- ② 靈験も著しく和歌を賞美あそばしたことだというわけで
- ③ 新しい体験として和歌をご鑑賞あそばしたということ
- ④ あらためて和歌を大切になさったとかいうことで
- ⑤ 今までになかったやり方で和歌に感動されたということ

問4 この説話から得られる教訓として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 42。

- ① 大体において、徳の高い立派な人は、身分が賤しいからといってその人を嫌ったりしてはいけない。かわいいからといって、過度に賞を与えすぎるのもいけない。しかし、憎いからといって、むやみに刑罰を加えたりするのもよくない。すべてに公平に恩恵を施すべきなのである。
- ② 総じて、このようなことは驕りの気持ち^{おこ}がもとで、おもんばかりが足りないことから起こるものだ。そのために、人生を無駄にし、深い後悔に沈むこともある。それゆえ、たとえわが身を秀でたものと思っても、人目を気遣い、よく世の習いというものに心慎むべきである。
- ③ 大体において、運の開けない者は、行動においても、事柄においても、至らないことが多い。いうべきでないことを口にしてしまったり、してはいけないことをしてしまい、思いがけない恥をかき、どうしようもないやつだと思われてしまうのである。
- ④ 主君でもあれ、父母、親類でもあれ、親友、知友でもあれ、悪いことは必ず諫めなくてはいけない。しかし、世の末ともなると、それもなかなか難しい。主人の悪い事を諫める者は、天の神こそ感心なことだと思おうだろうが、主人から恩顧にあずかることはありえない。
- ⑤ すべての人間は、その身分、条件に応じて、才芸の能を備える必要がある。才芸によって、人は幸福を得たり、強運を切り拓くということもあるわけで、何事につけても、才芸ある人が執り行えば、才芸のない人が行った場合と較べて、天地ほどの違いがあるように思われる。